様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2010～2014
課題番号：２２２４３０１９

研究課題名（和文）リカードウが経済学に与えた影響とその現代的意義の総合的研究

研究課題名（英文）The modernity of David Ricardo and his great impact on economics

研究代表者
出雲　雅志（Izumo, Masashi）

神奈川大学・経済学部・教授

研究者番号：１０２１１７３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　29,200,000円

研究成果の概要（和文）：　あわせて20回におよぶ国際会議とワークショップに15ヶ国40名あまりの海外研究者を招聘し、国際共同研究のネットワークを構築しながら、リカードウが経済学にもたらした影響と現代的意義を明らかにした。その成果の一部を、Sato and Takenaga (eds.) Ricardo on Money and Finance, Routledge, 2013とFaccarello and Izumo (eds.) The Reception of David Ricardo in Continental Europe and Japan, Routledge, 2014の２冊の英文論集にまとめた。

研究成果の概要（英文）：We held international conferences and workshops on David Ricardo, with over 40 overseas researchers from 15 countries, 20 times in total within the past 5 years. We clarified the modernity of Ricardo in the history of economic thought and his impact on economics, while building an international network of joint research.
The following two books in English are the outcomes of our research: Sato, Y. and S. Takenaga (eds.) Ricardo on Money and Finance, Routledge, 2013, and Faccarello, G. and M. Izumo (eds.) The Reception of David Ricardo in Continental Europe and Japan, Routledge, 2014.

研究分野：経済思想史

キーワード：リカードウ　古典派経済学　経済思想史　経済学史　経済理論史

１．研究開始当初の背景
(1) ピエロ・スラッファが編集した『デイヴィド・リカードウ全集』(1951-73) の刊行を契機として、この半世紀のあいだにリカードウの経済理論と経済思想に関する研究は著しい進展を遂げた。しかし、リカードウがその後の経済学の展開にもたらした影響とその意義を全体として跡づけた研究は、ほとんどない。だが、1960 年代以降のリカードウ研究の詳細で膨大な蓄積と、2000 年にリカードウ研究会を組織し意欲的に研究に取り組んできた本研究の参加者が、国内外の研究者とともに積み重ねてきた国際的な共同研究の進展によって、ようやく本研究の課題を遂行しうる段階にいたった。

(2)リカードウがその後の経済理論と経済思想に与えた影響は、一般に考えられているよりもずっと広くて深い。しかも、リカードウの経済学は、いまなお現代の経済学の理論的課題の基盤となっている。リカードウが経済学におよぼしてきた広くて深い影響を総合的に解明し、経済学の可能性の新たな地平を切り拓くことが、強く求められている。

２．研究の目的
(1)本研究の目的は、デイヴィド・リカードウが経済学にもたらした巨大な影響とその意義を、19 世紀初めから現代にいたる経済学の歴史の全体にわたって研究し明らかにすることにある。

(2) リカードウが経済学に与えた影響は、マルサスやマカロクなどの同時代人や J.S.ミル、マルクスのみにとどまらない。それは、マーシャル以降のケンブリッジの経済学やワルラスをはじめとするローザンヌ学派、スラッファやポストケインジアンの経済学、また公開市場操作に代表される通貨・金融の理論と政策、比較生産費説による国際経済学、課税論や国債論を通じた財政学、機械論による技術的失業論など、じつに広い範囲にわたっている。この総体を国内外のさまざまな分野の研究者の参加と協力のもとに多角的な視点から検討し、リカードウが経済学へおよぼした影響の現代的意義を、国際的かつ総合的な観点から解明することが、本研究の課題である。

３．研究の方法
(1)本研究は、リカードウが経済学にもたらした巨大な影響とその現代的意義を明らかにすることを目的として、国内外の共同研究者および研究協力者との緊密な連携のもとに遂行する。

(2)具体的には、①日本の研究を世界に向けて発信する日本のリカードウ研究アンソロジーの編集・翻訳とその公刊、②5 年間にわたる研究期間中に海外から多くの研究者を招く国際会議およびセミナーの企画・開催、③国際的な共同研究の成果の英語による公刊、を企画し実現する。

４．研究成果
(1)研究代表者および研究分担者 15 名と研究協力者 3 名、海外共同研究者 15 名によってスタートしたこの 5 年間の研究では、あわせて 20 回におよぶ国際会議とワークショップに 15 ヶ国から 40 名あまりの海外研究者を招聘し、共同研究の国際的ネットワークを構築しながら、リカードウが経済学にもたらした巨大な影響とその現代的意義を明らかにする努力を積み重ねた。

(2)その成果の一部を英文論集 2 冊にまとめて刊行した。「リカードウの貨幣・金融理論」をテーマとした国際会議をもとに研究分担者の佐藤有史と竹永進が編集した Sato, Y. and S. Takenaga (eds.) Ricardo on Money and Finance, Routledge, 2013 と「各国におけるリカードウの受容」をテーマとする国際会議をもとに研究協力者のジルベール・ファッカレロと研究代表者の出雲雅志が編集した Faccarello, G. and M. Izumo (eds.) The Reception of David Ricardo in Continental Europe and Japan, Routledge, 2014 である。いずれも国際共同研究の成果であり、海外で複数の書評がでるなど注目を集めている。

(3)現在さらに数冊の英文論集の刊行を準備しているが、Takenaga, S. (ed.) Ricardo and Japanese Economic Thought と Senga, S., M. Fujimoto and T. Tabuchi (eds.) Ricardo and International Trade が、それぞれ 2015 年と 2016 年に出版される予定である。これらの刊行によってリカードウ経済学の現代的意義とその研究の重要性があらためて再確認されることが大いに期待される。

(4)2013 年には海外共同研究者と協力してフランスのリヨンでリカードウ国際会議を開くとともに、欧米日の若手研究者向けのセミナーもあわせて開催した。このことも特筆すべきであろう。その成果はいくつかの英文ジャーナルに掲載される予定である。

(5) リカードウがその後の経済理論と経済思想に与えた影響は巨大である。第１に、マーシャルからケインズ後にまでいたるケンブリッジの経済思想への影響がある。トイ（John Toye: Keynes on Population, 2000）が強調するように、マーシャル以後の経済思想には「ケンブリッジ・ドクトリン」とでも呼びうる共通の認識が存在し続けた。イギリスは、農産物を輸入して工業製品を輸出するというリカードウが提唱した国際分業に依拠して経済成長を遂げたが、世界規模での農業の収穫逓減と工業生産の収穫逓増によって農産物に対する工業製品の交易条件が悪

化し、その結果イギリスの厚生水準が低下するというのがそれである。第2に、J.ロビンソンとN.カルドアは、スラッファのリカードウ研究（『リカードウ全集』の編集と『商品による商品の生産』の公刊）に触発され、直接・間接にリカードウの影響のもとに独自の経済学を展開した。第3に、リカードウの価値理論の発展型ともいうべきスラッファ理論を基礎に、スラッフィアンおよびポストケインジアンの経済学が展開されている。第4に、森嶋通夫（『リカードの経済学』1989）が指摘するように、一見するとリカードウの対極に立つようにみえるワルラスも、理論的ツールこそ異なるものの、そのヴィジョンは、経済成長に伴う地代の増加と利潤率（利子率）および実質賃金率の低下という長期的傾向を主張するものである（ワルラス『純粋経済学要論』1874-1877）。じっさい、リカードウに反発しながらもワルラスは、深いところでその影響のもとにあったとみることができる。

(6)リカードウの経済学は、いまなお現代の経済学の理論的課題の基盤であり、またその想源ともなっている。第1に、国際経済学の分野では、比較生産費説を通してリカードウの経済学は、現代の新古典派経済学にも基本的なアイディアを提供し続けている。第2に、課税の転嫁と帰着、国債累積の経済的効果の分析によって財政学および公共経済学の分野にリカードウがもたらした影響も、けっして無視することはできない（例えばバローやブキャナンらによる「リカードウの等価定理」を巡る論争）。第3に、リカードウの機械論は、マルクス（資本の有機的構成の高度化と相対的過剰人口の理論）やヴィクセル（『国民経済学講義』1906）、シロス-ラビーニ（『寡占と技術進歩』1956）、J.R.ヒックス（『経済史の理論』1969）、さらに森嶋通夫や根岸隆などが検討の対象としているように、技術的失業の理論に影響を与えてきた。真実一男の『機械と失業』（1959）のようなわが国におけるこの分野の研究の蓄積も注目されるべきであろう。第4に、公開市場操作の着想や中央銀行構想の提示を通じて、通貨・金融の理論と政策にもリカードウは強い影響を与えてきた。それは1970年代までほとんど忘れ去られていたかにみえるが、1990年代以降の世界的な金融危機の衝撃と古典派貨幣理論への関心の高まりのなかで、むしろリカードウの通貨・金融の理論と政策の再構築が今日の実践的な理論的課題となっている。

(7)これまでの5年間にわたる研究成果をふまえ、デイヴィド・リカードウを含む古典派経済学の現代性と多様性を、18世紀啓蒙の時代から現代にいたる経済理論と経済思想の歴史の全体にわたって研究し、古典派経済学の現代的意義を国際的かつ総合的な視点から解明するとともに、現代の経済学史研究の進展に寄与することが、今後の課題（展望）となるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　67　件）

①久松　太郎、A Mathematical Approach to Malthus's Criticism of Adam Smith in 1798、History of Economics Review、査読有、2016、巻号・頁未定

②出雲　雅志、戦前日本のリカードウ研究、成城大学経済研究所年報、査読無、第28号、2015、133-162

③久保　真、D. Stewart and J. R. McCulloch: Economic Methodology and the Making of Orthodoxy、Cambridge Journal of Economics、査読有、Vol. 38、No. 4、2014、925-943

④長峰　章、James Mill and John Stuart Mill on population、明治大学政経論叢、査読有、第82巻第3・4号、2014、315-330

⑤久保　真、George Pryme, Dugald Stewart, and Political Economy at Cambridge、History of Political Economy、査読有、Vol. 45、No. 1、2013、61-97

⑥佐藤　滋正、Japanese Studies on Ricardo after World War II、経済学史研究、査読有、第54巻第2号、2013、63-71

⑦服部　正治、Noboru Kobayashi and His Study on the History of Economic Thought、経済学史研究、査読有、第54巻第1号、2012、1-21

⑧福田　進治、欧米のリカード解釈論争の展開：1990年代以降の状況、マルサス学会年報、査読有、第21号、2012、47-70

⑨竹永　進、リカードの貨幣理論における貨幣価値論と貨幣数量説、経済論集、査読無、第96号、2011、107-148

⑩千賀　重義、Early Ricardo's Theory of Profit: From Two-Sector Approach to Value Theory、経済学史研究、査読有、第52巻第2号、2011、27-45

⑪川俣　雅弘、The Authorship of the Marginal Productivity Theory in 'the old Quarrel'、Keio Economic Studies、査読無、第46号、2010、43-59

⑫大島　孝治・佐藤　有史、海外アダム・スミス研究の動向：人文諸科学におけるその興隆と「アダム・スミス問題」の復活を中心にして、経済学史研究、査読有、第 52 巻第 1 号、2010、67-82

〔学会発表〕（計　92　件）

① 水田　　健、Ricardo’s Theory of International Trade and Capital Accumulation、Ricardo Conference、2015 年 3 月 8 日、ているる（沖縄・那覇）

②石井　穣、Inquiry (1820): A Study by John Barton on Population and Poverty、The 46th Annual UK History of Economic Thought Conference、2014 年 9 月 4 日、Westminster (England)

③藤本　正富、Robert Torrens’ Theory and Policy of International Trade、The 18th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought、2014 年 5 月 31 日、Lausanne (Switzerland)

④久松　太郎、Thomas Robert Malthus and His 1798 Theory of Oscillations、2014 History of Economic Thought Society of Australia Conference、2014 年 7 月 11 日、Auckland (New Zealand)

⑤久保　真、Becoming True Heir to Adam Smith: Dugald Stewart and his Non-Utopian and Non-Gloomy Version of Political Economy、The 41st Annual Conference of the History of Economics Society、2014 年 6 月 21 日、Montréal (Canada)

⑥益永　淳、The role of the chapter on foreign trade in Ricardo's theoretical system and its implication on the ability of a nation to pay taxes、International Ricardo Conference: New developments on Ricardo and Ricardian traditions、2013 年 9 月 11 日、Lyon (France)

⑦渡会　勝義、Value, price and income distribution、Seminars and Debates around the Work of David Ricardo、2013 年 9 月 9 日、Lyon (France)

⑧八木　尚志、Structural Dynamics and Inflation、The 17th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought、2013 年 5 月 18 日、London (England)

⑨千賀　重義、The Controversy between Torrens and Senior, and Ricardo’s Theory of Foreign Trade、International Ricardo Conference、2012 年 9 月 4 日、明治大学（東京）

⑩服部　正治、経済思想史における穀物の位置、経済学史学会第 76 回全国大会、2012 年 5 月 26 日、小樽商科大学（北海道・小樽）

⑪竹永　進、Value of money in Ricardo、The 16th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought、2012 年 5 月 18 日、St. Petersburg (Russia)

⑫川俣　雅弘、チュルゴの『価値と貨幣』の公理的分析、経済学史学会、2011 年 11 月 6 日、京都大学（京都）

⑬久保　真、From J.-B. Say to D. Stewart and J. R. McCulloch、The 38th Annual Conference of the History of Economics Society、2011 年 6 月 20 日、Notre Dame (USA)

⑭出雲　雅志、Marx, Ricardo and Buller、Congrès Marx International Ⅳ、2010 年 9 月 24 日、Nanterre (France)

〔図書〕（計　24　件）

① 竹永　　進、Routledge、Ricardo and Japanese Economic Thought、2015、ページ数未定

②渡会　勝義 他、Edger Elger Publishing、The Elger Comparison to David Ricardo、2015、672

③服部　正治、日本経済評論社、イギリス食糧政策論：FAO 初代事務局長 J.B.オール、2014、287

④出雲　雅志・佐藤　滋正 他、Routledge、The Reception of David Ricardo in Continental Europe and Japan、2014、249 (212-242)

⑤諸泉　俊介 他、昭和堂、マルサス　ミル　マーシャル、2013、265 (79-102)

⑥佐藤　有史・竹永　進 他、Routledge、Ricardo on Money and Finance、2013、222 (53-74、77-114)

⑦佐藤　滋正、日本評論社、リカードウ価格論の展開、2012、234

⑧川俣　雅弘 他、Routledge、Subjectivism and Objectivism in the History of

Economic Thought、2012、196（29-47）

⑨八木　尚志 他、Cambridge University Press、Structural Dynamics and Economic Growth、 2012、310（241-265）

⑩長峰　章 他、東京堂出版、ウェスタン・インパクト:近代社会経済思想の比較史、2011、261（237-256）

⑪益永　淳 他、中央大学出版部、功利主義と政策思想の展開、2011、580（64-97）

⑫久保　真・千賀　重義 他、昭和堂、イギリス経済学における方法論の展開、2010、391（97-126、165-196）

６．研究組織

(1)研究代表者

出雲　雅志（IZUMO, Masashi）
神奈川大学･経済学部・教授
研究者番号：10211731

(2)研究分担者

渡会　勝義（WATARAI, Katsuyoshi）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：80097196

服部　正治（HATTORI, Masaharu）
立教大学・経済学部・教授
研究者番号：20103913

長峰　章（NAGAMINE, Akira）
明治大学・政治経済学部・教授
研究者番号：70189158

竹永　進（TAKENAGA, Susumu）
大東文化大学・経済学部・教授
研究者番号：00119538

水田　健（MIZUTA, Ken）
東日本国際大学・経済情報学部・教授
研究者番号：80275651

諸泉　俊介（MOROIZUMI, Shunsuke）
佐賀大学・学内共同利用施設・教授
研究者番号：00210203

川俣　雅弘（KAWAMATA, Masahiro）
慶應義塾大学・経済学部・教授
研究者番号：80214691

佐藤　有史（SATO, Yuji）
湘南工科大学・工学部・教授
研究者番号：60288256

八木　尚志（YAGI, Takashi）
明治大学・政治経済学部・教授
研究者番号：90261825

藤本　正富（FUJIMOTO, Masatomi）
大阪学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：30330103

久保　真（KUBO, Shin）
関西学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：30276399

福田　進治（FUKUDA, Shinji）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：00322925

益永　淳（MASUNAGA, Atsushi）
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号：00384727

石井　穣（ISHII, Jo）
関東学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：10587629

久松　太郎（HISAMATSU, Taro）
神戸大学・経済学研究科・准教授
研究者番号：60550986

千賀　重義（SENGA, Shigeyoshi）
横浜市立大学・国際マネジメント研究科・特別契約教授
研究者番号：20036057
2013 年 4 月から連携研究者

佐藤　滋正（SATO, Shigemasa）
尾道大学・経済情報学部・教授
研究者番号：50115573
2013 年 4 月から連携研究者